

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬萊むしの会
第26号 2026.5.10

大原のオオムラサキの幼虫は何齢で越冬するのか (2)

大原のオオムラサキを守る会

1. はじめに

2013年に飼育網室で累代飼育が成功して以来毎年、その成長を記録していくことによって、大原のオオムラサキは4齢で越冬することを知った。『オオムラサキー日本の里山と国蝶の生活史ー』（栗田貞多男）¹⁾には、オオムラサキの越冬は「通常は暖地では5齢、寒冷地では4齢の形態をとる」とあり、オオムラサキからみると大原は寒冷地となるようであった。因みに当時、オオムラサキの飼育についていろいろとご教示いただいた秋山昭士氏によれば、お住まいの奈良県橿原市では5齢越冬とのことであった。

2022年9月になって、4齢では角状突起が短縮する越冬態にならず、5齢で越冬する個体がいる可能性に気付いた。越冬態の4齢と同じような形状の背面突起と体長でありながら、頭部の角状突起が長いままの個体がいたのである。

このことを明らかにするために、2023年8月2日に48頭の3齢幼虫を、天敵から守るために6つの網袋（洗濯用ネット）に分け入れて、野外エノキに取り付けた。これらの網袋を回収したのは、すべての幼虫が越冬態になったと考えられる10月中旬であった。6つの飼育網袋から57個の頭殻を取り出せた。これらは幼虫が脱皮するときに脱ぎ落したものである。

鱗翅目の幼虫の体長は連続して成長するが、頭殻は次の脱皮までほとんど成長しないという特徴がある。加えて脱皮殻の多くは脱皮した幼虫が食べてしまって残らないが、頭殻だけは幼虫が食うことなく落下する。この頭殻の幅を測定することによって、調査対象の幼虫の齢を知ることができる考えた。

2. 2023年の調査結果

これらの頭殻を双眼実体顕微鏡の視野に置いて、その幅を0.1mm単位の物差しで測定した。その結果を示したヒストグラムが図1である。2つの山が読み取れる。1.7mmを中心とした山（一つ目の山）は3齢から4齢への脱皮時のものであり、2.3mmを中心とした山（二つ目の山）は4齢から5齢への脱皮時のものと考えた。

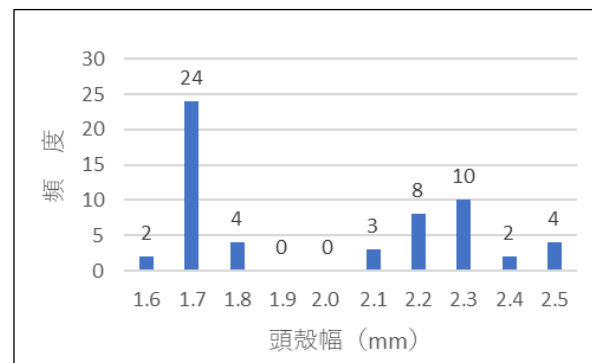


図1 頭殻幅のヒストグラム (2023年調査)

一つ目の山の総数は30であった。二つ目の山の総数が27なので、多くが5齢で越冬態になることが推測できたが、その差である3頭が5齢になることなく4齢で越冬態になったのであろうか。残念ながらそのように断言することはできない。網袋に入れたすべての幼虫が4齢になると仮定すると48個の一つ目の山の頭殻

が回収できるはずだが、多くの落葉や糞、あるいは網袋内で発生した微小昆虫の影響が大きく、回収率は62.5%であった。回収時に幼虫もいたが、生きている幼虫が22、死体が6（越冬態2、非越冬態4）であったことも判断を困難にさせた（回収率58.3%）。以上の結果の概要は『大原の里と比良の山』5号²⁾に報告した

この調査は以上のほかに、頭殻の測定方法にも課題があった。視野を双眼で見ることで、正確な測定ができないということであった。加えて、測定に携わった会員の個人差も大きいと思われた。これらの課題を解決するために測定者を単独として、双眼実体顕微鏡の右側接眼レンズにスマートフォン（以下、スマホ）のカメラレンズを当てて撮影し、撮影後、画像を拡大して同じ試料を再度測定した。接眼レンズにスマホを安定的に設置するために、自撮り棒を使用した（図2）。

測定結果を図3に示した。測定方法の改善により、二つの山が一層明瞭になった。一つ目の山の総数が34、二つ目の山の総数は23、その差が11となり、5齢で越冬態になる個体が多いものの、4齢で越冬態となる個体もいる可能性をより深くした。

3. 2024年の調査結果

2023年の調査で4齢越冬幼虫と5齢越冬幼虫が混在している可能性が分かったので、それを明らかにするために2024年7月17日に2回目の調査を開始した。2023年の調査方法の反省から、複数頭を一つの網袋に入れるのではなく網袋を小さくして（小型洗濯用ネット）1齢幼虫を一袋に1頭ずつ入れたものを70準備して、野外エノキに取りつけた（図4）。網袋を回収したのは10月30日であった。エノキに戻した幼虫以外を大原学院理科室に持ち込んで、全員で手分けして頭殻を取り出した（図5）。多くの枯れ葉や糞などの中から探し出すのは2023年同様に困難を極めた。

取り出せる頭殻数は全個体が5齢に達していると仮定すると、1齢、2齢、3齢、4齢の頭殻なの



図2 双眼実体顕微鏡、スマホ、自撮り棒を使用した頭殻撮影装置

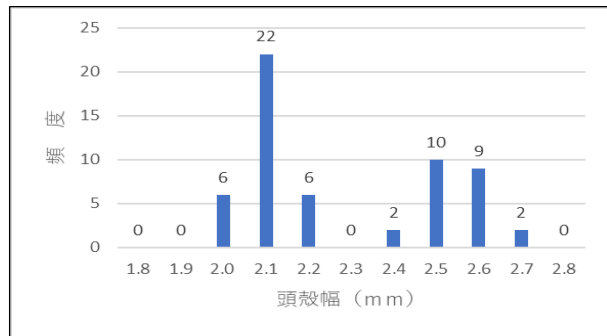


図3 2023年調査をスマホ測定したヒストグラム



図4 小型洗濯用ネットのエノキの枝への取り付け



図5 小型洗濯用ネットから頭殻を取り出す

で280のはずだが、実際は99であった。この理由は幼虫の成長途中での死亡と見落としが大きい。とりわけ1齢の頭殻は微小で、発見数が少なかった。

探し出した99の頭殻を図2と同様の方法で撮影したが、その過程でこの方法の欠陥に気付いた。立体物(頭殻)を双眼実体顕微鏡の片方の接眼レンズで見ることによる誤差が生まれることである(図6参照)。加えてこの方法は全部の撮影を終了するまで日数を要し、その都度スマホを脱着する必要があるため手数を要した。

いくつかの試行錯誤を重ねた末、最後にたどり着いたのがデジタルカメラによる撮影であった。オリンパス stylusTG-4 を使用したが、このカメラは接写機能が優れている上にファインダーが大きく、レンズ部分を直接頭殻の上に置いて撮影できた(但し、のちに撮影することになる次の齢の頭殻は厚みがあり過ぎて、カメラを少し浮かす必要があった)。

撮影した頭殻幅のヒストグラムが図7である。最高値を1.2mm、1.6mm、2.2mm、2.6mmとする山が4つ読み取れた。これらは1齢、2齢、3齢、4齢の山であると考えられた。問題の3齢の山と4齢の山は2023年と同様に、3齢が多く37、4齢が少なく14あった。その差は23で、この数が4齢で越冬態になった数であるとは、見つけられなかった頭殻があまりにも多すぎて残念ながら言えない。しかし、2023年同様、越冬態になるのが4齢と5齢が混在している可能性に、より確信を持つことができた。

4. 2025年の調査結果

2025年は調査手法を変更して、網室内で越冬を終えて起眠し、蛹に至るまでの脱皮で落下する頭殻を拾って測定することにした。越冬明けのオオムラサキは、越冬齢が何齢であっても、3回脱皮して蛹になることが知られているので、それを脱皮齢決定の参考とした。落下頭殻の採取は、事前に網室内に防草シートを敷いておいたので、さほど困難なく行えた。

落下頭殻の採取は4月23日、5月7日、5月14日、5月21日に行い、全採取数は460であった。これらを2024年と同様に stylusTG-4 で撮影し、その頭殻の横幅を、画像を拡大して測定を試みたのだが、これまでにない困難に直面した。採取した頭殻は3種類の形状があった(図8)。最も大きな頭殻は蛹になるための脱皮殻であり、頭殻は縦に裂け目が入っていたことにより、調査対象から

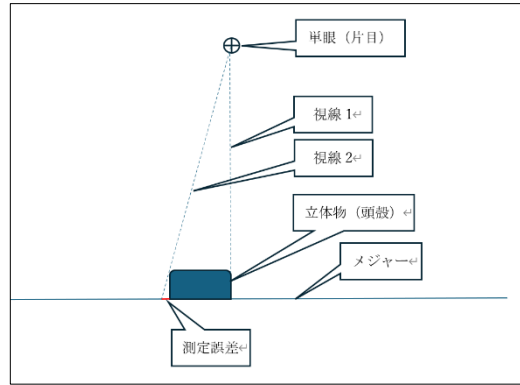


図6 単眼(片目)で立体物を計測する場合に測定誤差が生じることの説明図

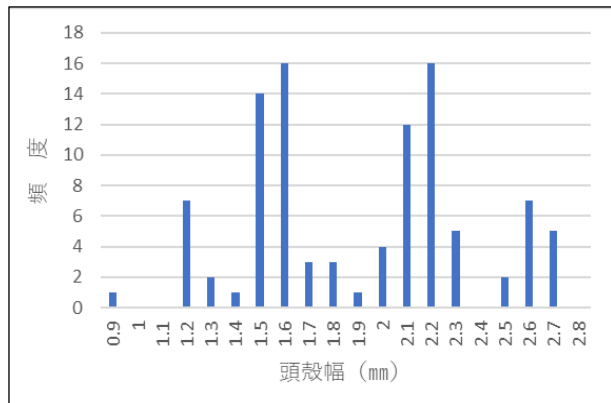


図7 頭殻幅のヒストグラム(2024年調査)



図8 飼育網室内で採取した3種類の頭殻

除外した。もっとも小さい頭殻は越冬幼虫のものである。これは色が褐色で頭上突起が太く短くなっているために、他の頭殻とは安易に識別できたが、他の頭殻との相違はそれだけにとどまらず、頭殻の側面を中心に細毛が密生して頭殻の輪郭が定かでなく (図 9)、これが測定を難しくさせた。

これまでの測定方法を断念し、側面の突起に目を付けた。3対の突起が生えているが、その突起の図 10 に示す間隔を測ることにした。具体的には撮影画像をパソコン上で一定の倍率に拡大させてデバイダーで間隔を測り、その長さを定規上で読み取った。同様の測定方法を次の脱皮殻 (最終齢になるための脱皮殻) にも用いた。stylusTG-4 で撮影した 460 の画像に対するこれらの操作は会員 6 名が分担して行った。

6つの測定結果を図 11 に示す。①と②は越冬幼虫の頭殻、③～⑥はその次の齢 (終齢になるとき) の測定結果である。この調査は各ヒストグラムがふた山型になることを期待して行ったものであるが、いずれのヒストグラムも明瞭なふた山型を見出すことはできなかつた。しかし一山型の分布をしているとも言いがたい。



図 9 側面に細毛を密生させた越冬幼虫の頭殻

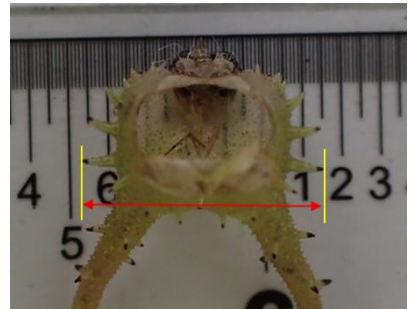


図 10 2025 年の頭殻幅測定範囲 (赤線)

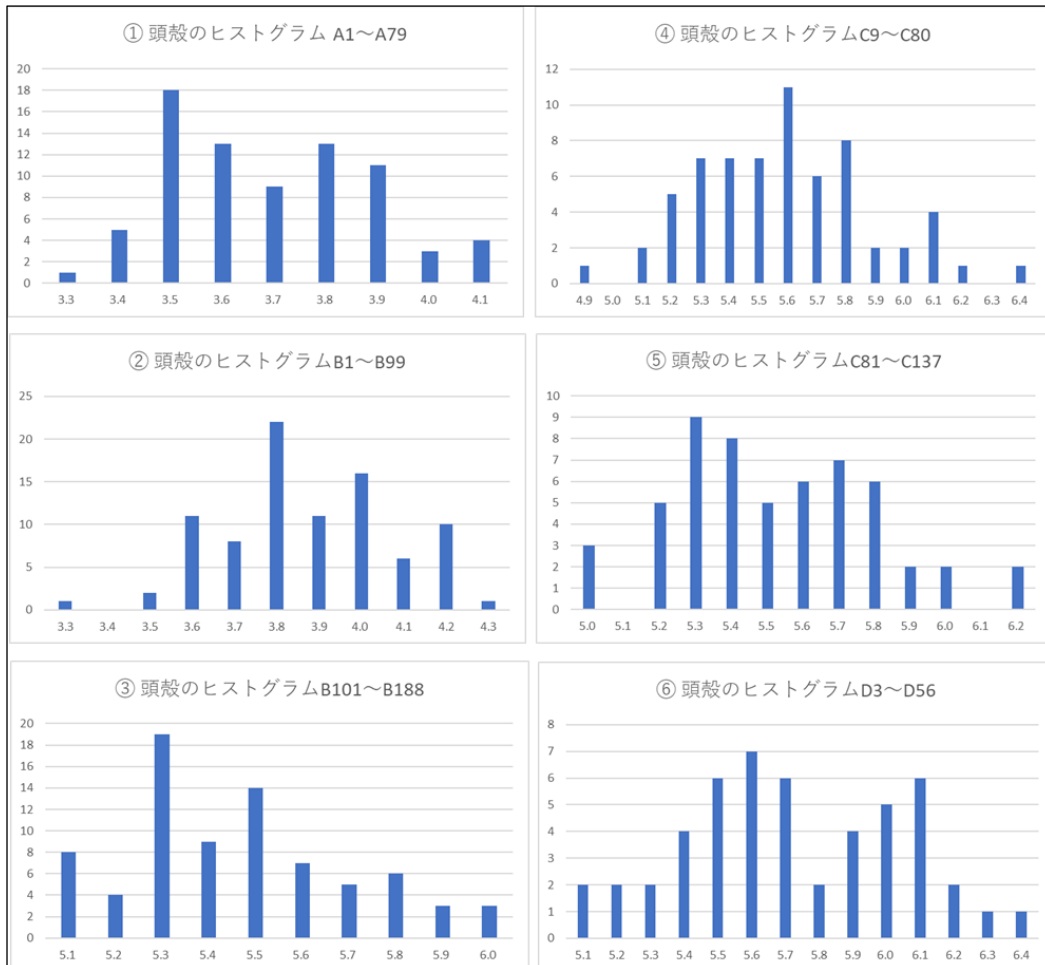


図 11 頭殻幅のヒストグラム (2025 年調査。調査者 6 名による各結果)

5. 今後の課題

この調査を行う端緒は、大原でのオオムラサキ幼虫の越冬は、4 齢と 5 齢が混在しているのではないかという疑問から始まったが、それを証明することはできなかった。一方で、どちらかの齢だけであるということも断言することもできなかった。このような結果になったのは次の 3 つの原因が考えられる。

- a. 飼育網室内歩行者に踏みつけられて頭殻が変形した。
- b. 側面突起を測定したが、不均一な形状が見られた。
- c. 測定時の個人差・測定誤差が生じた。

大原でのオオムラサキ幼虫の越冬は、4 齢と 5 齢が混在しているのではないかという疑問の解明は、もう一步のところまで不首尾に終わった。しかし越冬齢が確定しない、あるいは成虫になるまでの幼虫齢が確定しないままでは、今後の累代飼育や諸調査に大いに不便をきたすので、解明は急務である。2026 年は 2024 年のように、1 齢幼虫を 1 頭ずつ入った袋をエノキに取りつけて、短い間隔で袋内を精査していくことが問題解明に必要と考えている。

6. 引用文献

- 1) 栗田貞多男 (2007) オオムラサキー日本の里山と国蝶の生活史ー. 信濃毎日新聞社: 116-119.
- 2) 大原のオオムラサキを守る会 (2024) 大原のオオムラサキは何齢で越冬するのか、大原の里と比良の山 5、3-4. (文責: 藤野適宏)

大原 いのちの季 (とき)

皐月

シャガ

和田橋から高野川の左岸をたどる細い道の桜の古木の下にシャガの群落があり、4 月の下旬から 5 月にかけてたくさんの白い花を咲かせています(右図)。

シャガはアヤメ科の常緑の多年草で人家の近くの森林の周辺の木陰などのやや湿ったところに群生しています。草丈は 50~60 cm ほどで葉はつやのある緑色で平べったい形をしています。



花はアヤメの仲間では最も早く咲きます。白い花弁は 6 枚に見えますが 3 枚は花弁のように変化したガクです。中央に黄色い模様がありそれを紫の模様が取り囲んでいます(下図)。

本州から九州まで広く分布していて家の庭などにもよく植えられています。よく知られた植物なので日本の在来種のように思われがちですが、原産地は中国でかなり古い時代に日本に持ってこられて広がった帰化植物なのです。おまけに種ができないために日本にあるすべてのシャガは同じ遺伝子です。広く見られるのは人の手で植えられていったからです。



学名 *Iris japonica* (日本のアヤメ) となっているのは江戸時代末期に日本にやってきたスウェーデン人の植物学者が日本の在来種と誤って命名したからです。漢字では射干と書きます。これはよく似たヒオウギの中国名を誤ってつけたことに由来します。ちなみに射干の中国の発音の「Shègān (シュー ガァン)」がシャガの語源といわれています。

(文 小松清弘 写真 的場亮一)

校庭の樹木

藤野 適宏

昔勤めていた中学校で1年間、教務主任という役割を担ったことがある。その学校は教職員数が80名を越える大規模校で、加えて、当時は多くの中学校が直面していたことであったが、学校運営は困難を極めていて、日々の業務に追われて教職員間の連絡調整もままならなかった。毎日授業開始前に短時間、職員朝礼というのをやるのだが、連絡事項が多すぎて、それを口頭で行ってはいとて始業に間に合わなかった。そこで苦肉の策として考案されたのが、「職朝タイムス」の配布であった。重要事項は口頭で言うが、あとはそれを読んでおくようにということである。

教務主任は職員朝礼を仕切り、B5一枚の「職朝タイムス」を毎日発行する。頭を悩ませたのは「職朝タイムス」の内容そのものよりも、その埋め草であった。日によっては紙面に記事が十分埋まらないこともある。今のように字体や文字サイズ、行間を容易に変化させられる時代ではなかった。勿論、コマースを入れるわけにもいかない。今、1年間作成した「職朝タイムス」を見返すと、いつでも埋められるように“公用文に使用する用語の改善について”とか“出席簿記入テスト”などのシリーズものを準備していたことがわかる。その中のひとつに“藤中名木シリーズ”というのがあった。学校の敷地は広く、誰も立ち入れないような藪もあった。そのような校庭に105種もの樹木があることがそれまでの調査で分かっていた。それを、機に応じて種ごとに紹介していくのである。紹介に

職朝タイムス 3月16日(土) 225号

○ **本日の予定**

- ①②③の授業
- 学習指導係(2限)
- 運営委員会(3限)
- 公立高校合格発表

○ **評語 3限 終結**

- 【卒業式無事終了】身の纏む寒さの中、厳寒に、立派にとり行われました。いい卒業式でした。
- 【藤中名木シリーズ無事終了】長らくのご愛読有難うございました。登録樹種全種(105)を紹介することはできませんでしたが、少しでも木に親しんでいただけとしたら幸いです。(じんちよ5科科)
- 【緑のチョーク】今まで本校にはなかったのですが、理科の先生の要望で入荷しています。ご入用の方は山崎さんまで。
- 【新1年生】15日現在で、男子228名、女子218名、合計446名です。441名を割ると11クラスになります。
- 【3学期授業日数】

	1・2年	3年
1月	20	20
2月	23	23
3月	19	13
合計	62	56

	1年	2年	3年
1学期	84	85	85
2学期	91	91	91
3学期	62	62	56
合計	237	238	232

○ **明後日の予定**

- ①②③④の授業、45分
- 2年球技大会(雨天中止)
- 学年同和(1年3限)
- 1年学年集会(4限)
- 教育後援会指命委員会(7:00~)



図1 職朝タイムス 225号

表1 職朝タイムスに登場した樹木

番号	種名	科名	番号	種名	科名
1	ハコネウツギ	スイカズラ	41	カリソ	バラ
2	タチバナモドキ	バラ	42	グツケイジュ	クスノキ
3	シャリンバイ	バラ	43	キンモクセイ	モクセイ
4	イボタノキ	モクセイ	44	ヒイラギモクセイ	モクセイ
5	ボブラ	ヤナギ	45	ドングリ	ブナ
6	カシワ	ブナ	46	ツブラジイ	ブナ
7	タイサンボク	モクレン	47	マテバシイ	ブナ
8	マツ	マツ	48	クスギ	ブナ
9	カツカブキ	ヒノキ	49	コナラ	ブナ
10	ネズミモチ	モクセイ	50	アラカシ	ブナ
11	アジサイ	ユキノシタ	51	シラカシ	ブナ
12	フジ	マメ	52	クスノキ	クスノキ
13	クちなし	アカネ	53	ソテツ	ソテツ
14	ハナソノツクバネウツギ	スイカズラ	54	アメリカハナミズキ	ミズキ
15	ナンテン	メギ	55	ソメイヨシノ	バラ
16	カクレミノ	ウコギ	56	イロハカエデ	カエデ
17	アオギリ	アオギリ	57	イチヨウ	イチヨウ
18	ムラサキシキブ	クマツツラ	58	モミジバフウ	マンサク
19	ヤマモモ	ヤマモモ	59	トサミズキ	マンサク
20	キョウチクトウ	キョウチクトウ	60	センダン	センダン
21	ムクゲ	アオイ	61	ヤツデ	ウコギ
22	シダレヤナギ	ヤナギ	62	アオキ	ミズキ
23	ウバメガシ	ブナ	63	サンゴジュ	スイカズラ
24	モッコク	ツバキ	64	サカキ	ツバキ
25	サルスベリ	ミシハギ	65	ヒサカキ	ツバキ
26	カツラ	カツラ	66	キンキマメザクラ	バラ
27	ツツキ	ツツジ	67	ヒマラヤスギ	マツ
28	ドウダンツツジ	ツツジ	68	クワガネモチ	モチノキ
29	イヌツゲ	モチノキ	69	ユズリハ	ユズリハ
30	サザンカ	ツバキ	70	ヒノキ	ヒノキ
31	ヤマハギ	マメ	71	サワラ	ヒノキ
32	アキニレ	ニレ	72	スギ	スギ
33	コリノキ	モクレン	73	ツガ	マツ
34	ニシキギ	ニシキギ	74	トベラ	トベラ
35	カキノキ	カキノキ	75	ヒイラギナンテン	メギ
36	ビワ	バラ	76	ツバキ	ツバキ
37	ムクノキ	ニレ	77	ウメ	バラ
38	エノキ	ニレ	78	アセビ	ツツジ
39	ケヤキ	ニレ	79	サンシュユ	ミズキ
40	シロ	ヤシ	80	ジンチョウゲ	ジンチョウゲ

当たっては必ず図版を挿入した。図版は「牧野新日本植物図鑑」(1961. 北隆館) からコピーして使い、和名や科名もそれに準拠した。

この年度の「職朝タイムス」は4月7日に始まり3月23日に終わっていて、230号まで発行した。そのうち“藤中名木シリーズ”は5月19日のハコネウツギから始まり、3月16日のジンチョウゲで終わっていて(図1)、80回を数えた。記載する樹種はできるだけその頃に開花するものを選んだ。記載した80種を表1に示した(この中に45回目にドンダリというのがあり1種減るが、8回目にマツがあり、これにはアカマツとクロマツが含まれていて、全体では80種)。記載されなかったのが25種あるが、今となってはそれが何であるか、知るすべがなく残念である。

80種を科別に集計し、種数の多い順に並べたのが表2である。全38科のうちブナ科が8種と最も多かった。このうち常緑樹が5種あった。校内緑化の観点で植栽されたように思う。因みに80種のうち常緑樹は45種で、半数よりやや多かった。ブナ科に続いてバラ科が7種、ツバキ科が5種、ニレ科、モクセイ科、マツ科が各5種となった。裸子植物はヒノキ科、マツ科、イチョウ科、スギ科、ソテツ科の5科10種で、残る70種は被子植物である。単子葉植物はヤシ科シュロの1科1種があり、実に多種多様な樹木を紹介できた。

“藤中名木シリーズ”は80回で終わっているが、そのあとしつこく4回にわたり“藤中名木シリーズ余録”というのをやっている。4回目の文末に「より一層緑に親しんでもらうために、この春休み、名札を付けることにしました・・・」と綴っている。苦勞して名札を作り、何人かの方と一緒に名札を樹木に下げた記憶は残っている。私はその年の4月に異動があり、その後の校庭を見る機会がないままとなっている。作成して36年が経過して、校庭も様変わりしてきつと名札もなくなっていることだろう。奇跡的に手元に残存している名札が1枚あるので披露する。落葉樹を茶色(図2。どちらかというとおレンジ色に見える)、常緑樹を緑色のアクリル板で作った。これは青少年センターの所員の方にお世話になって、シルクスクリーンという手法で作ったと記憶している。

表2 科別種数

No.	科名	種数	No.	科名	種数
1	ブナ	8	21	アカネ	1
2	バラ	7	22	イチョウ	1
3	ツバキ	5	23	カエデ	1
4	ニレ	4	24	カキノキ	1
5	モクセイ	4	25	カツラ	1
6	マツ	4	26	キョウチクトウ	1
7	スイカズラ	3	27	クマツヅラ	1
8	ツツジ	3	28	ジンチョウゲ	1
9	ヒノキ	3	29	スギ	1
10	ミズキ	3	30	センダン	1
11	ウコギ	2	31	ソテツ	1
12	クスノキ	2	32	ユズリハ	1
13	マメ	2	33	トベラ	1
14	マンサク	2	34	ニシキギ	1
15	メギ	2	35	ミソハギ	1
16	モクレン	2	36	ヤシ	1
17	モチノキ	2	37	ヤマモモ	1
18	ヤナギ	2	38	ユキノシタ	1
19	アオイ	1			
20	アオギリ	1	計		80

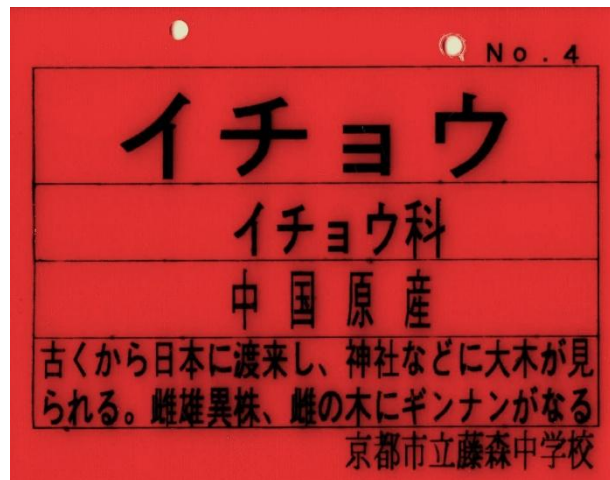


図2 校庭の樹木名札“イチョウ”

なんじゃもんじゃ

藤野 適宏

1. はじめに

ウィキペディアによれば、「ナンジャモンジャは、特定の場所に生えている見慣れない立派な植物、怪木や珍木に対して地元の人々が付けた愛称。(中略)。ヒトツバタゴをさすことが多いが他の樹種の場合もある。」とあります。

そのヒトツバタゴの話です。この木は分布がとても変わっていて、牧野新日本植物図鑑によれば、「本州中部の木曾川流域と対馬に自生する」とあります。どのような経過でそのような分布になったのか、それだけでも“なんじゃもんじゃ”です。それにヒトツバタゴという和名も変です。どこで切って発音すればいいのやら。これも先の図鑑によれば、タゴはトネリコの一名で、トネリコは複葉なのにこれは単葉であることに由来しているとのことでした。

2. 対馬のヒトツバタゴ

ヒトツバタゴの名を初めて知ったのは2014年です。次の年の春、対馬のアサギマダラに会いに行く計画を立てていました。まったく知らない土地なので地理や歴史、自然について調べる中で、ある本に対馬の鰐浦地区はヒトツバタゴの国内最大級の自生地であると書かれていました。花の頃は山全体が真っ白になるというのです。急遽、アサギマダラ以外にヒトツバタゴの花との出会いも達成目標に書き加えました。

しかし残念ながら、この目標を果たすことはできませんでした。対馬へ行ったのは5月18日～21日で、ヒトツバタゴの花期はとっくに終わっていたのでした。アサギマダラが最優先の計画だったので仕方なかったのですが、出会いたい気持ちはつのるばかりでした。

3. 宇治市立植物公園のヒトツバタゴ

5年程前、宇治市立植物公園の駐車場付近で、ヒトツバタゴと名札のある木を見つけました。こんな身近にあることを嬉しく思い、4月下旬～5月上旬の花の時期に何度か行きました。そのうち図1が最も見事な開花で案外しょぼく、なんとも感激性に乏しいものでした。それよりも周囲の山々がシイの花で白く染まっていたのが印象的で、ヒトツバタゴとシイの開花はシンクロすることに気付くことができました。



図1 宇治市立植物公園のヒトツバタゴ
2025.5.3

4. 境谷本通のヒトツバタゴ

2026年4月24日、京都市西京区洛西ニュータウン内の境谷本通を車で移動していた時のことです。助手席にいた妻が、「なんじゃもんじゃ？」とつぶやきました。見ると街路樹に白い花が咲いています。こんなところにヒトツバタゴがあるはずがないと思い、そんなわけではないと即座に否定しました。しかし妻は時折、動物的と思える勘が働くことがあります

ます。なぜなんじゃもんじゃを知っているのかを尋ねると、最近、ネットで見たと言いました。

ヒトツバタゴでないとなれば、境谷本通の花は何なのか。どうも気になったので、4月26日に再び行って、車を停めて見ることにしました。果たしてヒトツバタゴでした。境谷本通は東西の通りで、京都縦貫道大原野IC入口までの約100mの南側に植えられていました。まだ三分咲き程度でしたので5月1日と3日にも見にいって、やっと満足できるヒトツバタゴに出会えたように思いました(図2・図3)。



図2 ヒトツバタゴの花 2026.5.1



図3 ヒトツバタゴの街路樹 2026.5.3

5. 沙沙貴神社のヒトツバタゴ

何故ヒトツバタゴが街路樹になったのか。こののち、ネットでヒトツバタゴについて少し調べました。近畿地方でもあちらこちらに植栽されているようです。滋賀県近江八幡市の沙沙貴神社のそれはとりわけ立派で、大勢の見物客が訪れるそうです。もはや“なんじゃもんじゃ”ではないのかもしれませんが。

<4月おもな活動の報告>

◆4月1日(水) 10:00～、13:45～ (報告者:奥谷)

○参加者 小松、藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、奥谷、計8名

○活動内容

- ・会議 ①本日の活動内容
 - ②セブンイレブン助成金報告書作成と進捗状況
各自の分担をそれぞれ入力し皆で点検する——提出は12日中
 - ③生物多様性センター友の会について
 - ④地元の方、諸団体よりの謝礼、納品について
- ・作業 午前
 - ①網室内の幼虫の確認 ②網室周辺のエノキの袋への幼虫投入
 - ③野外のエノキへ幼虫を放出 ④剪定枝の処理と網室内の除草
 午後(文化C)
 - ①セブンイレブン旅費報告書への捺印 ②セブンイレブン報告写真の追加撮影

◆4月8日(水) 10:00～ (報告者:奥谷)

○参加者 小松、藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、奥谷、計8名

○活動内容

- ・会議 ①本日の活動内容
 - ②セブンイレブン助成金作成と進捗状況
未報告文—担当者が記入し皆で点検する。提出—12日中に小松さんが提出
 - ③やましろ里の会からの連絡
 - ④助成金新年度予算の執行—必要物品については随時購入していく
鹿よけ網の支柱、ドングリ園の看板、他
 - ⑤総会—来週午後の予定

- ⑥放蝶会—6月20日(土)か27日(土)、学校と調整する。記念品を検討する
- ・作業 ①ルートセンサス ②網室外のエノキに袋を取り付けて幼虫を投入
③第2網室外のエノキの根元に幼虫を放出
④セブンイレブン報告写真の追加撮影(午後 文化C—藤野、的場)

◆4月22日(水)10:00～、13:30～ (報告者:奥谷)

○参加者 小松、藤野、塩尻、木村、的場、大友、村上、上田、奥谷、計9名

○活動内容

(午前)網室

- ・会議 ①本日の活動内容
②セブンイレブン助成金報告—領収書、物品の写真送る。7月までに精査され受理されれば送金される
③今後の活動について—フジバカマの差し芽、フジバカマ畑の補修、網室の網の補修
 - ・活動 ①ルートセンサス ②網室外のエノキに害獣除け網の設置 ③エノキ苗の移植
- (午後)文化センター
- ・オオムラサキの会総会—詳しくは別紙総会資料参照
①2025年度活動報告 ②会則 名簿 ③役員承認 ④2026年度活動計画
⑤定例活動日の設定 ⑥2026年度予算の執行 ⑦視察・旅行 ⑧その他特記事項

◆4月28日(火)9:45～13:35 (報告者:大友)

○参加者 大友、小松、的場、村上 計4名

○活動内容:びわ湖バレイルートセンサス

◆4月29日(水)10:00～、13:20～ (報告者:小松)

○参加者 藤野、塩尻、木村、的場、大友、村上、小松 計7名

○活動内容

(午前)網室

- ・会議 ①本日の活動内容 ②網室内の幼虫について
 - ・活動 ①幼虫の観察 ②畦シートの撤去 ③網室内の除草
- (午後)文化センター
- ①2025年度会計報告(暫定)—セブンイレブン助成金の報告が終了後に正式に報告する
 - ②特別展示、ワークショップ—時期、内容等についての検討

＝ 目 次 ＝

大原のオオムラサキの幼虫は何齢で越冬するのか(2)	1
大原 いのちの季(とき) 皐月 シャガ	5
校庭の樹木	6
なんじゃもんじゃ	8
4月おもな活動の報告	9
目次	10

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会 2026年5月10日 第26号

H P 大原のオオムラサキを守る会 <https://ohara-omurasaki.com/>

大原のオオムラサキを守る会代表 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町54 小松清弘

蓬莱むしの会代表 〒520-0105 大津市下坂本1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原21-151 藤野適宏